

図書館たより

号数 第70号
発行日 昭和60年10月25日
編集発行 島根県立図書館
松江市内中原町52
TEL(0852)22-5725
印刷 島根印刷株式会社



子供読書会用図書

親子読書から子供読書活動へ

木次町立図書館 館長 塔 間 武

暗中模索しながら親子読書をはじめたのは、昭和53年からでした。それは親と子の心のふれあいと子供に読書の楽しさを知らせることをねらいとしてはじめた活動でした。翌年に読書普及モデル町村の指定を受けて活動は軌道に乗り、町教育委員会・幼稚園・小学校・図書館の連携協力により町内全幼稚園児、全小学校1・2年児童を対象とする活動に発展し今日に至っています。この8か年の親子読書の基盤には、幼年期における読書指導による図書館利用の向上への指向と、「健康の町」木次の心と社会(家庭)の健康づくりへの志向があったのです。

親子読書活動を進めながら、その発展的な活動のあり方に思いをいたし、椋鳩十氏の「母と子の20分間読書」や静岡県「茶の間ひととき読書」運動に関心をもったこともありました。

昭和58年秋、町内一企業から図書費の寄贈を受けたおり、親子読書の発展的活動の契機と思い、そのあり方を考えました。そのころマスコミの報道で県立図書館が構想している子供読書モデル指定事業を知り、それに示唆を受けて地域子供文庫の創設を考えたのです。町教育委員会と協議した結果、地域子供文庫の設置は、図書館から遠隔地の子供たちを対象に行うこと、文庫活動を軌道に乗せていながら

子供読書活動に発展するように努めることの計画ができました。その計画実現の手はじめとして、寄贈図書費による図書の購入をはじめました。一文庫に1セット70冊を配本する計画で、6セット分を58年度内に59年度から文庫活動ができるように準備をしました。59年5月、県立図書館指導員、町内学校図書主任教員、町内公民館主事、図書館職員の合同研修会をもち文庫活動と子供読書について研修を行いました。そして公民館、地区PTA、地区子供会に文庫設置を働きかけました。その結果、3公民館、1地区PTA、1地区子供会に文庫を設置する運びになりました。その運営は、公民館は館の創意によって、子供会は子どもたちの手によって、地区PTAは親子の協力で行うことになりました。子供読書を軌道に乗せるため、そのモデルケースを地区PTA管理の文庫で実施することを計画し、はじめに県立図書館西山主幹を招き子供読書の実践と指導を受け、子供読書が誕生しました。現在、その実践の積み重ねを試みています。地域子供文庫は、地区子供会で運営するのが望ましく、親子読書は指導員の確保が何よりの問題であることを思う昨今です。遅々とした歩みでありますけれども地域子供文庫、子供読書ともに育てていきたいと思っております。

ぐりとぐら文庫

私達の文庫活動④ —小さな文庫活動から—

松江市大庭町 神・田 あつ子

今から10年程前、新聞に文庫活動をしている人の話が載っているのに目が止まった。学生時代にほんの少しだが児童文化研究会というサークルに入っていたことがある。このサークルで児童文学などについて話し合い子供の本の研究をしたこともあるので興味をそそられた。ちょうど長女が生まれた年で我が子と一諸に読書もいいなと思った。しかし、共働きをしていたので、時間的余裕がなく断念せざるをえなかった。

その後、長女の友達のお母さんで東京から引越してきた人と知り合いになった。その方は東京で文庫活動をしておられた人だった。親しくなるうち、「文庫をやってみないか」ということになり、不安を抱きつつも励まされ、試みるようになった。

私の住んでいる所は松江市のはずれにあり県立図書館へ行くのにバスで30分位かかる。時折、図書館から10冊の本を借りていたが、返却に行く時は10冊は重く感じられ、もっと近くに図書館があったらと常々思っていた。



文庫を始めるためには、先ず本を揃えなければならぬ。図書館へ行き、団体貸出で100冊の本を借りて帰った。2人で50冊ずつ分け、文庫を始めた。始めたといっても2DKのアパート住まいの玄関にちょっと置いたのみである。貸出しカード、記録のための利用カードを作り、返却期限を1週間と定め、利用してもらうことにした。最初の1ヶ月で20組ほどの利用者があり、本が足りないほどであった。2～3ヶ月すると10組の利用者となり、定着してきた。2～3ヶ月単位で県立図書館へ行き、図書との交換をし家に置く冊数は少ないけれども常に新しい本を置

くようにした。図書館の本も始めは古い本が多かったがだんだん新しい本が増えてきた。借りに行く私達も嬉しくなり、文庫に良い本を選んで置くのが私達の仕事だとわくわくして行った。そのうち、本を寄贈して下さる方、手伝いに来て下さる方もあり、少しずつ順調にすべり出していった。

文庫をはじめてから1年位すると誰ともなく子供達に読み聞かせをしてやろうということになった。月2回、第1・第4金曜日の16時からお母さん達が順番に2～3冊の本を読んで聞かせた。子供達も「あつ、きょうはぼくのお母さんだ」と喜んで聞いている。お母さん達も少し緊張しながら椅子に座って読む。真剣に見ている子、寝ころんで聞いている子、などさまざまであったがいやがる子は一人もいなかった。クリスマスには小学生が中心となりクリスマス会なども行った。この文庫を通じて母親同志も大変親しくなり、昼食を持ち寄り、手芸をしたりした。自分の子のみでなく、みんなで成長していくことはいいことだと話し合った。

いろいろな行事をすることは楽しい。しかし、お世話をする側は大変である。いろいろな都合で出られなくなったり、寒くなると皆よけい集まりが悪くなってきた。しかたなく読み聞かせをしばらく休むことにした。

文庫を始めてからまもなく2年目を迎えようとしている。いろいろやってみたいことがいっぱいある。しかし、地域の子供に根ざしたやり方でないと子供達がついてこない。これからはもっと子供達をみつめ、興味ある者みんなが文庫を開き、輪を広げていきたい。

団体貸出しの利用を！

昨年度より、子供読書事業が新しいモデル事業になった。吉田・大東・東出雲・桜江・呂智の5町村がモデルに指定され、子供読書グループと文庫が地区毎に設置された。親子読書・子供読書の普及とともに読書に対する関心も高まり、ボランティアで文庫を開く人も増えてきている。図書館ではそういう人のために3ヶ月以内、100冊以内の本を貸出している。問い合わせは

島根県立図書館管理課普及係 TEL(0852)22-5729まで。

読み聞かせたい郷土の民話

書名	著(編)者	発行所	刊年
(島根県)			
日本伝説大系 11巻 山陰	酒井董美 他	みずうみ書房	S 59
島根県の民話	日本児童文学者協会	偕成社	S 56
出雲・石見の伝説	酒井董美・萩坂昇	角川書店	S 55
日本の民話 8 山陰	川上 勉 彦 他	ぎょうせい	S 55
島根の伝説	島根県小・中学校国語教育研究会	日本標準	S 54
日本昔話通観 8 島根	稲田浩二・小沢俊夫	同朋舎	S 53
民話と文学	民話と文学の会編刊		S 52
島根のむかし話	島根県小・中学校国語教育研究会	日本標準	S 51
島根県の昔話概要	森脇太一	森脇太一	S 49
島根の昔話	酒井董美	新聞掲載	S 46
出雲・隠岐の伝説	石塚尊俊	第一法規	S 52
(出雲地方)			
ふるさとのむかし話	庄司英夫	六道町	S 59
やすぎの民話	安来市教育委員会	安来市教育委員会	S 57
全国昔話資料集成33奥出雲昔話集	田中 肇 一	岩崎美術社	S 55
島上の昔話	酒井董美	横田町立横田中学校	S 48
馬木昔話集	島根大学昔話研究会	島根大学国語研究室	S 48
ひらたしのむかし話	平田市老人のための明るい町		S 54
島根県簸川郡佐田町民話集	島根大学昔話研究会	島根大学昔話研究会	S 54
松江伝説の旅	西尾忠良	共同企画出版	S 54
出雲比田の民俗	畑 伝之助	山陰民俗学会	S 50
鼻きき甚兵衛 一出雲の民話一	田中肇一・酒井董美	桜楓社	S 49
吉田・三刀屋昔話集 1・2・3	京都女子大学説話文学研究会編刊		S 47
出雲の昔話	立石憲利	日本放送出版協会	S 51
出雲の民話	石塚尊俊	未来社	S 55
島根半島漁村民話集 1・2	島根大学昔話研究会	島根大学教育学部	S 57
(隠岐)			
魚屋と山姥 一隠岐島前の昔話一	酒井董美	桜楓社	S 55
布施村の民話と民謡	島根民話研究会編刊		S 53
都方村の民話	隠岐島前高校郷土部編刊		S 53
隠岐島の伝説	野津 龍	島根大学教育学部	S 52
隠岐島前民話集	島根大学昔話研究会編刊		S 52
隠岐島昔話資料目録	森脇太一 編刊		S 50
(石見地方)			
全国昔話資料集成36石見昔話集	森脇太一	岩崎美術社	S 59
むかしばなし想いでばなし 正・続	西益田公民館	西益田公民館	S 57~58
ふるさと宇野の昔話	浜田市宇野町公民館編刊		S 57
長久の昔ばなし	栃木 律子	長久公民館	S 57
(文集) 昔こっぶり 1・2・3	羽須美村教育委員会編刊		S 55~57
石見の昔話	酒井董美	日本放送出版協会	S 54
島根県三瓶山麓民話集	大庭良美	未来社	S 53
浜田の民話と史話 1・2	島根大学昔話研究会編刊		S 52
美濃郡匹見町昔話集	森脇太一 編刊		S 52
それぼっちり物語 石見銀山昔話伝説集	島根大学昔話研究会編刊		S 51
大和村昔話集 稿 卷二	大崎雪枝 編刊		S 51
浜田の民話 1~3	島根大学昔話研究会	島根大学教育学部	S 50
江津の昔話	浜田市立図書館編刊		50・52
	江津市文化財研究会編刊		S 48

開館当初より、山間の小学校2校からスタートした移動図書館も今年で11年目を迎えました。この間他の学校からも巡回希望が出、増えていきましたが学校統合により、現在では3校を対象に毎月1回の巡回を行っています。約400冊の本を数個の専用箱に詰め、ライトバンにのせ運んでいきます。

学校に着くと、1年生から6年生までの全校生が順番に借りに来ます。時には講堂で、わたり廊下で、教室で貸出しをします。何しろ授業時間帯に訪問するのですから、当然、学校側の理解、図書係の先生の協力が必要になります。

1冊でも多くの本と子供達との出会いを願いながら、今まで何万冊の本を運んだことでしょう。決して充分なものではなかったけれども移動図書館を通じて多くの本が子供の心の中に生き続け、心の支えになったことと思います。

男の子は、釣りの本・野球の本・手品の本・マイコンの本をよく借ります。女の子は、料理の本・昔話の本・手芸の本などです。また、名作全集・古典全集・マザーグースの本・江戸川乱歩全集などは根強い人気があります。

時々、子どもたちからこんな便りが届きます。「ぼくは、毎月やってくる移動図書館がとても楽しみです。本を選ぶときはじっくり選ぶので、いつも

最後の方まで残されてしまいます。けどじっくり選んだ本はとてもおもしろいのですぐ読んでしまいます。ぼくたちの小学校の図書館は松山図書館とい

って日本の歴史のまんが版とか、伝記・昔話などいろいろあってとてもいい図書館だと思います。まだあまり整備されていないけれど、だんだん整えられてきました。でも、ぼくは移動図書館が好きです。移動図書館の一番いい所は図書館で本を借りようと思っても遠くて借りにいけない人のために、学校まで来てくれるところだと思います。それに本を借りるとき、簡単でとても借り易いです。

ところでぼくのお母さんはとても本が好きです。だから、ぼくと妹が移動図書館で借りた本をぼくたちが学校へ行っている間に1冊・2冊と読んでいきます。そしてぼく達が学校から帰ってくると、『たかちゃん、あの本おもしろいなあ。』といいます。ぼくも『うん、おもしろいだろう。ぼくが選んだんで。』といばります。ぼくは家族みんなで楽しめる移動図書館が大好きです。

これからも、移動図書館の来るのを待っている子どもたちのためにたくさんの本を運び続けていきたいと思います。

わが町の自動車巡回

江津市立図書館

⑥

NEWS

市町村読書普及研修会開く

去る7月26日、東出雲町の中央公民館で、8月8日、金城町のみどり会館で市町村読書普及研修会を開催した。午前中は読進協の会長である岡先生を講師に「家庭における読書」という演題で講演があった。午後は親子読書・子供読書の現状と問題点について話し合った。親子読書については今後継続していくためには指導員の確保が必要であり、現場の先生方の自立が大切である。子供読書については指導員から多くの課題が出され、具体的な指導の研修会をしてほしいという要望が出された。



郷土夏期講座開催

夏も終りの8月27日、当館集会室において島根大学教授、田中瑩一先生と島根女子短期大学助教授、藤岡大拙先生を講師に「島根の民話」「尼子晴久論」という演題で開催。収録されたテープをもとに身近な民話を聞いたり、尼子三代目の城主、晴久について一般論と違った角度からとらえた興味深い話であった。

東出雲町 町立図書館になる

昭和52年町民会館の完成にともない、「中央公民館図書館」が開館。55年度に県の指定をうけ「中央図書センター」に改称された。5ヶ年計画で本格的な図書館を目指し、図書の整備が進められ、本年7月に条例で「東出雲町立図書館」になった。

蔵書数は59年10月末現在、10,400冊。本の利用状況は10,666冊で町民1人当り年間1.08冊の本が利用された。